

□解説

問一 a ゆうちょう b ひとなつ「ついく」 c 無邪氣 d 合点

問二 i ウ ii ア iii エ

問三 イ

問四 秋 さつちゃんが誰よりも愛しているのは娘さんやお孫さんなのであって、自分が同じ愛情を夏夜さんに求めてもらいたい。

問五 夏夜さんが誰よりも愛しているのは娘さんやお孫さんなのであって、自分が同じ愛情を夏夜さんに求めてもらいたい。

問六 あこがれのような甘えのような感情

問七 イ なえられることはない。

問八 夏夜さん

織細「えい」

問九 エ

問十 エ

問一 a 分析 b 売買 c 富裕 d く「ちる」

問二 オ 人名一 ウ 人名2 ア 人名3 エ 人名4 オ

問三 一 四分法思考を自由にあやつるユーモア感覚を身につけ、人として成熟できるという点。

問四 2 現実にとらわれない自由な発想を持ち、創造的な営為を生み出せるようになるという点。

問五 3

問六 (1) 常識のもろさ、偏りに気がつかない人

問七 (2) 役立たないことが役に立つ「ということ。」

問八 医師

問九 エ

問十 エ・カ

□解説

問二 (3) 「たしなみ」には、①趣味や余芸、②心得(技艺を身につけていること)、③節度(行き過ぎのない適当な程度)、④心がけ、などといった意味がありますが、文中では、人としてのエチケットに関連づけられていますから、③の意味で使われていると判断できます。

問三 息子を亡くした悲しみから何とか立ち直ろうとしているときだったので、できればその話題には立ち入ってほしくなかつたのでしょう。だから、感情をこめず「やりげなく」言ったのです。ウは、「大好きな夏夜さん」という表現が不適切です。息子の死について語り合つたことを境にさつちゃんと夏夜さんは親しくなっていくのですから、この時点で「大好き」であったかどうか定かではありません。

問四 直前の「金木犀の香り」から判断しましよう。金木犀は秋、独特的の強い芳香を放つ花をつきます。

問五 直後の夏夜さんの言葉に着目しましょう。さつちゃんの、「子供を持つと、母親は強くなりますね」という言葉に対し、夏夜さんは答えます。子供のために鬪う母親は強くなつたわけではない。「鎧」という重荷を背負つただけだと。さつちゃん自身も感じているように、「母親は強い」などという言葉は、母親の本当のつらさから目を背けただけの、うわべだけの「当り障りのない常套句」にすぎないものなのです。自分で口にしたにも関わらず、さつちゃんはこの言葉に虚しさすら感じてしまいますが、夏夜さんも、そうした虚しい言葉の響きを「敏感」に感じ取り、さつちゃんの言葉をやんわりと否定したのです。

問六 さつちゃんは夏夜さんに対し、理想の母親像を重ねています。自分の実の母親の厳しさや、ユーモアのなさに比べ、夏夜さんの優しげな風情や上品なたずまいにあこがれのような気持ちを抱いていたのです。そうした心情については「あこがれのような甘えのような感情」と表現されています。

問七 夏夜さんのような人にはあこがれ、彼女を母親と呼びたいと願つても、それは叶えられるわけもないのです。そうしたむなしさや切なさを「哀しさのようなもの」と表現しているのです。

問八 夏夜さんに理想の母親像を重ねていたさつちゃんでしたが、ある夜、夏夜さんが娘さんやお孫さんに愛情に満ちた眼差しを注いでいる姿を目にし、「夏夜さんにとつて世界中で一番貴いもの」は娘さんであり、お孫さんであります。「ああ、そうよね」には、そうした「現実」に対する落胆や悲しみ、あるいは、叶えられもしないことを願つていた自分に対する憐れみや蔑み、といった複雑な感情がこもっています。

問九 夏夜さんに理想の母親像を求めるこのむさしさを感じたさつちゃんは、あらためて実の母親のことを思います。彼女も夏夜さん同様に、「鏡」を着ていたのかもしれない。そしてもしそつなら、その「鏡」の下にはやはり夏夜さんと同じ、傷を負わないようガードしなくてはならない「心の一番柔らかな部分」を持っていたのかもしれない。

問十 そうした、心の傷つきやすさ、「デリケートさを「繊細」と言います。

問十 「——(ダッシュ)」がついた部分を追つていくと、さつちゃんの心の動きをおさえていくことができます。まず、「ああ、そうだ。タベ夏夜さんの一家が……」は、さつちゃんが夏夜さん一家と会つたことに関し、「ある思い」を持ったことを暗示します。そして、「私、きっと、いつも自分の『母親』を探してたんだ……」「……夏夜さんが娘さんの一家を連れて……寂しく思った」「おろかなことだ」と追つていくと、その「思い」が何であつたのかが明らかとなつてきます。また、その後の二つの「——」の部分も、つなげて読んで見ると、実の母親へのさつちゃんの思ひがつづられていると分かります。

問三 『人名4』には、「アメリカ西部のほら話」「落語『あたま山』」と並ぶような「ほら話やナンセンスの世界」と言える作品の、著者名が入ります。すぐ前の段落の「大渓谷」の話が「アメリカ西部のほら話」と、頭の上にできた池」の話が「落語の『あたま山』」とそれぞれ対応しているので、『人名4』の著した作品は「笑つている猫」「非誕生日」の「プレゼント」と対応します。身体が消失してもその笑いだけを空間に残す「笑う猫」とは、「不思議の国のアリス」に登場する「チエシャ猫」のことです。また、『非誕生日』の「プレゼント」とは、「鏡の国のアリス」の中で、ハンプティ・ダンプティがアリスに見せた、誕生日でない日に贈られたプレゼントのことです。『人名4』には、「不思議の国のアリス」「鏡の国のアリス」の作者であるルイス・キャロルが入ります。

問四 まず、「ユーモア感覚とは……とらわれない物の見方や価値観を持ち、自由な発想を生むゆとりのある精神……」「第一の常識をわきまえながら第二の常識にとらわれないのが人間としての成熟であり、それを可能にするのがユーモア感覚である」という記述に着目しましょう。つまり「一つめの利点は、「ユーモア感覚を身につけ、人として成熟できる点」だとれます。できれば、「ユーモア感覚は……四分法で物を眺め」ることである、という内容も含めましょう。

次に、「創造的な営為はすべて第二の常識から自由になるところで生まれている」「現実にとらわれない、人間の自由な発想は……すばらしい世界をつくる」などといった記述に着目しましょう。これが二つめの利点と考えられますから、これらをまとめましょう。

問五 空欄の直前の「常識が見落としがちな」に着目します。つまり空欄には「常識」からはややぞれでいる考え方を入れます。常識的に考えれば「幸福」なものと言える「結婚」を「不孝」とする「B」や、不幸なものと考えがちな「離別」を「幸福」ととらえる「A」が、それにあたります。

問六 (1) 「二分法の世界に安住する観念の固定した人」は、ものごとを「いいか」「悪いか」でしか判断できず、したがつて固定された常識を信奉し、「常識のもうさ、偏りに気がつかない人」となつてきます。また、観念を固定しているがゆえに、常識にとらわれない発想、たとえば「ほら話やナンセンスの世界」についていげず、「実生活に密着し、実益だけを尊ぶ人」となつてきます。

(2) 常識的な考え方しかできない人にとって、結婚を不幸なものとしてとらえる考え方や、離別を幸福なこととしてとらえる考え方とは、どのようなものと思えるでしょう。このような発想は、あえて人と違うことをやりたがるだけの「アマノジャク」な人、あるいは「ヘソ曲がり」な人特有の、ひねくれた発想と思えるのでしょうか。

問七 「木の靈」の話は、莊子の説く「無用の用」を分かりやすく説明するための比喩です。「無用の用」とは、「役立たないことが役に立つ」という意味です。「木の靈」は、ほかの生きものから必要とされない存在となつたこと、すなわち「役立たないこと」が、寿命をまつとうするという我が身にとって最も重要なことに「役立つた」と言つています。

問八 盲腸は、現代のヒトにとつて生理機能がほとんどなく、役に立たないものと考えられてきました。しかも、しばしば炎症を起こして切除手術を必要とします。このことを、医者は盲腸を切除するという仕事をする上で、盲腸が必要だ、とジョークで言つているのです。

問九 工は「唯一絶対の尺度」が不適切です。ユーモア感覚を持つ人は固定された観念にとらわれない人なのですから、そうした人の持つ尺度が一つだけ、ということはありません。力は、「表現力を持つ莊子こそが、眞のユーモリスト」が不適切です。莊子が眞のユーモリストと呼ばれる理由は、「伸縮自在の物さし」を持っていいるからであり、「表現力」が豊かだからではありません。